

はじめに

教育学部教育改善委員会委員長 前田晶子

本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、4月の授業開始が2週間延期され、さらに5月初旬までの2週間は遠隔授業のみの実施措置が取られました。また、その後も距離を確保するための教室内の人数制限や消毒作業が必要となり、安全な学習環境の整備が行われました。後期も引き続き遠隔授業の全面実施が随時要請されるなど、その時々状況に対応することが求められました。

また、授業は学習管理システム manaba や Web 会議システム Zoom、YouTube 等を活用して実施することになり、講義や演習、実習などをどのように進めるのかが課題となりました。4月に遠隔授業推進委員会が学部に設置され、教育改善委員会も参画しました。特に、今回の遠隔授業の導入を「FD 活動の一環」として捉え、その観点から本委員会の活動計画の見直しを行いました。それは、以下に示すように、活動の全体に及ぶことになりました。

1. 授業アンケート：従来は紙媒体で実施していた調査を、今年は manaba を用いて行い、各教員1科目を設定して学生に回答を求めました。対面や遠隔などの「授業形態」についての問いを従来の調査項目に加え、分析を行いました。また、授業アンケートを学生とのコミュニケーションの一環と捉え、調査後に科目毎の集計と教員のコメントを学生にフィードバックしました。

2. 授業紹介：教員の FD 活動である授業公開については、実施困難と判断し、代わって「授業紹介」を行いました。各教員が従来の対面授業をどのように遠隔授業として実施したのか、その際の工夫や困難さ、実施後の成果についてまとめ、教授会で共有しました。後期は、全学的にスクーリング期間が設けられたことから、第二回授業紹介を引き続き実施しました。

3. 学生 FD 委員会企画シンポジウム：学生 FD 委員会の活動は、制限下でも Zoom 等を用いて継続的に行われました。12月のシンポジウムもまた Zoom 開催となりましたが、本年度の授業や学生生活についての意見交換や、次年度に向けた改善策、新入生へのピアサポートのあり方などが論議されました。今年は学生 FD サミットも不開催となり、その分シンポジウムの意義が大きかったと思います。

4. 教育学部 FD 講演会：7月にラーニング・アナリティクスについての講演会を実施しました。Zoom でのオンライン開催となりましたが、他学部からも多く参加がありました。学

習者の学習プロセスをデータとして蓄積し、教育改善に活かすラーニング・アナリティクスは、授業形態に関わらず、学習者の学習行動に目を向けさせるものであり、興味深いものでした。遠隔授業でも学習者主体の学習が組織できることを学ぶことができました。

5. 教育学研究科教育実践総合専攻懇談会：研究科院生と教職員との懇談会を対面で実施し、本年度の研究上の問題や要望について聞く機会を持ちました。院生の抱える課題として、調査等の難しさから当初の研究計画を変更せざるを得ないことや、孤立しがちな状況にあることが明らかとなりました。講義だけでなく、研究を支援する仕組みを次年度に向けて検討することとなりました。

以上が本年度のFD活動の主なものです。これらは従来の計画を変更しながら実施したものであり、不十分なところもあったかと思います。特に、2つの点を課題として挙げておきたいと思います。

1つは、FD活動を有意義なものにする上での教員と学生の相互理解の重要性です。教育は教員と学生の非対称な関係の上に営まれるものであるがゆえに、対面が制限される中ではFD活動が双方にとって負担となり得ます。しかし、同時に、通常の対話が難しい時こそFD活動がお互いを知る有効なツールとなることもあります。この一年は、FD活動のこの両面を実感することになりました。

2つは、FD活動において教員と学生だけでなく、職員の存在が大きいということが挙げられます。遠隔授業の導入はそのことを強く認識させられました。現在も職員がFD活動に関わっていますが、その役割の評価は潜在的なものに止まっています。今後は、教員－職員－学生の三者が参加するFD活動を全体として構想していく必要があるといえます。

最後に、ベストティーチャー賞最優秀賞を本学部教員の山口武志氏が受賞されました。数学教育の魅力と同時に卒業後の就業に誘う仕掛けや、形成的評価を駆使して個別の支援とグループ活動の活性化に活かす工夫など、教育学部における魅力的な授業のかたちを示していただきました。

次年度もしばらくは対面授業の制限が予想されますが、これまでのFD活動の蓄積を土台としたよりよい教育の追求が期待されます。

目次

第一部 鹿児島大学教育学部の教育改善に関する活動報告

1章 授業アンケート回答の分析

1 実施方法	1
2 実施状況	1
3 結果	2
4 総括	5

2章 令和2年度教育学部授業紹介報告

1 授業紹介の実施計画	6
2 授業紹介の実施状況	6
3 授業紹介における記述	6
4 まとめ	8

3章 教育学部学生FD委員会の活動

1 学生FD委員会の概要	9
2 各活動についてと振り返り	9
3 今年度の成果と今後の課題	11

4章 令和2年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会FD講演会

1 講演会について	12
2 学部長からの挨拶	12
3 講演概要	12
4 質疑応答(抜粋)	15
5 まとめにかえて	16
6 参加者からの感想	16

第二部 鹿児島大学大学院教育学研究科の教育改善に関する活動報告

1章 令和2年度教育学研究科教育実践総合専攻「教育改善アンケート」調査

1 はじめに	19
2 調査の実施方法	19
3 結果及び教育改善委員会の分析や対応	19
4 おわりに	22

2章 令和2年度教育学研究科教育実践総合専攻「院生・教職員懇談会」

1 はじめに	25
2 懇談会実施の概要	25
3 学生より出された意見及び教職員による回答・助言	25
4 おわりに	26

編集後記	27
------	----

1章 授業アンケート回答の分析

1. 実施方法

令和2年度の授業アンケートは、学習管理システム manaba を利用して実施した。対象科目は、教育学系に所属する各教員が教育学部で開講する科目から1つ（希望があれば2つ以上も可）を事前に申請することで設定した。なお、事前の申請がない場合には、教育改善委員会の判断により、履修者が多い科目を1つ設定した。

アンケートの実施期間は、前期：7月13日（月）から8月11日（火）、後期：1月18（月）から2月12日（金）とし、それぞれ各曜日に複数回の授業期間の幅を設けて設定した。

アンケートの実施後、教員は manaba 上で、アンケート結果に対するフィードバックを記載し、履修者に当該科目の集計値とともに公表した。

質問項目については、2018年度、2019年度のものをベースとしながら、遠隔授業の導入による影響を鑑みて、一部の項目を改訂した。具体的な変更点としては、授業について尋ねる文言を、「授業（課題）」のような表記に改めたこと、授業形態に関する項目を設けたこと、内容が他と重複していたり、冗長であったりするものを整理したことなどが挙げられる。具体的な質問項目は下記の通り。最後に任意回答として自由記述欄を設けた。

Q1 この授業はどのような形態で行われましたか。複数の組み合わせを用いた授業の場合には、最もよく使ったものを選んでください。

- (1) 遠隔ライブ (Zoom 等) (2) 遠隔オンデマンド (YouTube 等)
(3) 資料配布と課題レポートのみ (4) 対面授業

Q2 この授業に関して、あなたは毎週平均してどのくらい学習をしましたか。予習、講義動画の視聴、復習課題、掲示板を読むなど、すべてを合わせた時間で回答してください。

- (1) 5時間以上 (2) 4時間から5時間程度 (3) 3時間から4時間程度
(4) 2時間から3時間程度 (5) 1時間から2時間程度 (6) 1時間以下

Q3 あなたはこの授業（課題）に主体的に取り組むことができましたか。

- (1) そう思う (2) だいたいそう思う (3) あまりそう思わない (4) そうは思わない
(選択肢は以下 Q4 から Q11 まで同じ)

Q4 あなたはこの授業の内容を十分に理解することができましたか。

Q5 授業（課題）はシラバスの内容に沿ったものでしたか。

Q6 シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか。

Q7 教師の説明は分かりやすかったですか。

Q8 この授業（課題）は、あなたの興味・関心を高めるものでしたか。

Q9 資料（板書、スライド、講義動画、配布資料等）は授業の理解を助けるものでしたか。

Q10 この授業は質問がしやすい雰囲気でしたか（メールや manaba 上での質問等を含む）。

Q11 この授業は全般的にみて満足するものでしたか。

2. 実施状況

前期の実施科目数は 99 科目（うち 9 科目は入学年度によって名称が違うなどの実質的な同一科目であるため、実際には 90 科目で実施された）、そのうち回答者がゼロであったものはない。

のべ履修者数 3,490 名のうち、有効回答件数は 1,825 件（無回答 1,665 件）であり、回答率は 52.29% であった。

後期の実施科目数は 86 科目（うち 5 科目は実施的な同一科目があるため、実際には 81 科目で実施された）、そのうち回答者がゼロであったものはない。のべ履修者数 2,955 名のうち、有効回答件数は 1,180 件（無回答 1,775 件）であり、回答率は 39.93% であった。

3. 結果

(1) 前期の全体像と授業形態別のスコア

前期アンケートの結果を表 1 に、授業形態別のスコアを表 2 に示す。令和 2 年度前期は、新型コロナウイルス感染症対策のため、対面授業が制限されたことに伴い、Zoom 等を利用した遠隔ライブ型の講義が多く開講されたようであった（65.04%）。いずれの授業形態においても、学習時間はやや不足気味であり、特に 1 時間以下の学生数（354 名、19.40%）がやや多いようであった。

授業形態別にみると、ほぼすべての項目で「対面型」の数値が低く（＝評価がよい）、「資料提示型」の数値が高い（＝評価がよくない）。ただし「対面型」の平均学習時間は最も短い。なお、「資料提示型」は、解答のばらつきが相対的に大きいようであった。

表 1 前期アンケートの結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	回答件数					
			遠隔ライブ	オンデマンド	資料配布	対面		
Q1 授業形態	--	--	1187	201	315	122		
Q2 学習時間	--	--	5:00+	5:00-4:00	4:00-3:00	3:00-2:00	2:00-1:00	1:00-
			61	60	149	430	771	354
			そう思う	だいたい そう思う	あまり そう思わない	そうは 思わない		
Q3 主体性	1.62	0.69	883	786	127	29		
Q4 理解度	1.80	0.69	624	980	186	35		
Q5 シラバス内容	1.56	0.62	906	836	64	19		
Q6 シラバス目標	1.82	0.66	558	1063	174	30		
Q7 説明	1.59	0.77	1004	620	141	60		
Q8 興味関心	1.66	0.78	905	686	176	58		
Q9 資料	1.55	0.71	1021	644	120	40		
Q10 質問	1.77	0.84	825	661	268	71		
Q11 満足度	1.63	0.74	921	712	146	46		

注. 平均値、標準偏差は、そう思う = 1、だいたいそう思う = 2、あまりそうは思わない = 3、そうは思わない = 4 として算出した。

表2 授業形態ごとのスコア (前期)

	遠隔ライブ		オンデマンド		資料配布		対面	
	<i>n</i> = 1187		<i>n</i> = 201		<i>n</i> = 215		<i>n</i> = 122	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Q2 学習時間	4.63	1.22	3.97	1.17	4.45	0.98	5.20	0.81
Q3 主体性	1.60	0.67	1.60	0.62	1.81	0.80	1.36	0.53
Q4 理解度	1.76	0.67	1.77	0.62	2.07	0.78	1.47	0.56
Q5 シラバス内容	1.53	0.60	1.51	0.56	1.73	0.71	1.51	0.58
Q6 シラバス目標	1.79	0.65	1.82	0.58	2.05	0.74	1.58	0.56
Q7 説明	1.49	0.70	1.53	0.65	2.06	0.96	1.46	0.65
Q8 興味関心	1.60	0.73	1.63	0.76	2.00	0.93	1.47	0.67
Q9 資料	1.49	0.66	1.47	0.60	1.83	0.90	1.54	0.68
Q10 質問	1.67	0.79	1.98	0.91	2.10	0.93	1.53	0.68
Q11 満足度	1.54	0.68	1.62	0.67	2.03	0.89	1.43	0.60

(2) 後期の全体像と授業形態別のスコア

後期アンケートの結果を表3に、授業形態別のスコアを表4に示す。令和2年度後期は、対面授業が一部で再開され、オンデマンド型、資料配布型の講義が減少した。前期と同様にいずれの授業形態においても学習時間はやや不足気味であり、特に1時間以下の学生数(317名、26.86%)が多い。

前期と同様に、授業形態別にみると、ほぼすべての項目で「対面型」の数値が低い(=評価がよい)が、「遠隔ライブ型」および「オンデマンド型」とはそれほど遜色がない。「資料提示型」の数値は相対的にやや高い(=評価がよくない)ようであった。

表3 後期アンケートの結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	回答件数					
			遠隔ライブ	オンデマンド	資料配布	対面		
Q1 授業形態	--	--	731	75	35	339		
Q2 学習時間	--	--	5:00+	5:00-4:00	4:00-3:00	3:00-2:00	2:00-1:00	1:00-
			37	27	95	262	442	317
			そう思う	だいたい そう思う	あまり そう思わない	そうは 思わない		
Q3 主体性	1.65	0.70	545	515	103	317		
Q4 理解度	1.82	0.71	398	624	132	26		
Q5 シラバス内容	1.43	0.57	709	436	28	7		
Q6 シラバス目標	1.80	0.66	385	663	117	15		
Q7 説明	1.58	0.76	656	395	95	34		
Q8 興味関心	1.65	0.78	601	432	106	41		
Q9 資料	1.52	0.70	683	412	57	28		
Q10 質問	1.72	0.83	575	413	57	28		
Q11 満足度	1.62	0.73	600	459	92	29		

表4 授業形態ごとのスコア（後期）

	遠隔ライブ <i>n</i> = 731		オンデマンド <i>n</i> = 75		資料配布 <i>n</i> = 35		対面 <i>n</i> = 339	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Q2 学習時間	4.71	1.19	4.36	1.12	4.37	1.40	4.76	1.19
Q3 主体性	1.69	0.70	1.67	0.68	2.00	0.77	1.53	0.67
Q4 理解度	1.85	0.71	1.85	0.61	2.31	0.76	1.70	0.71
Q5 シラバス内容	1.43	0.57	1.51	0.60	1.80	0.72	1.40	0.55
Q6 シラバス目標	1.81	0.64	1.84	0.68	2.11	0.58	1.73	0.70
Q7 説明	1.59	0.76	1.59	0.62	2.54	0.98	1.46	0.70
Q8 興味関心	1.68	0.79	1.72	0.67	2.26	0.92	1.50	0.74
Q9 資料	1.52	0.69	1.55	0.64	1.94	0.94	1.46	0.68
Q10 質問	1.69	0.81	1.81	0.80	2.29	1.02	1.71	0.86
Q11 満足度	1.63	0.74	1.69	0.64	2.26	0.89	1.51	0.70

(3) 過年度との比較

過去2年間のスコアの推移を表5に示す。なお、実施方法や質問項目は年度によって多少異なるため、おおよそ類似の内容を問うているものを令和2年度のものに並べている。すべての項目について、H30年度、R1年度からの推移はほとんどない（せいぜい0.1ポイント減）であるため、コロナ禍への対応の中、ある程度十分な学習機会を与えることができたと言ってよいだろう。

表5 過去3年間の各項目スコアの推移

	R2 後期		R2 前期		R1 後	R1 前	H30 後	H30 前
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>M</i>	<i>M</i>	<i>M</i>
Q3 主体性	1.65	0.70	1.62	0.69	1.56	1.56	1.67	1.64
Q4 理解度	1.82	0.71	1.80	0.69	1.74/1.71	1.56/1.27	1.72/1.71	1.72/1.70
Q5 シラバス内容	1.43	0.57	1.56	0.62	1.56	1.56	1.43	1.59
Q6 シラバス目標	1.80	0.66	1.82	0.66	1.98	1.98	1.79	2.03
Q7 説明	1.58	0.76	1.59	0.77	1.48	1.48	1.62	1.57
Q8 興味関心	1.65	0.78	1.66	0.78	1.57	1.59	1.60	1.58
Q9 資料	1.52	0.70	1.55	0.71	1.48	1.51	1.57	1.54
Q10 質問	1.72	0.83	1.77	0.84	1.72	1.76	2.02	2.04
Q11 満足度	1.62	0.73	1.63	0.74	1.52	1.54	1.60	1.57

注. R1, H30 は理解度に関する項目が2つあったため併記している。過去のスコアの標準偏差は報告書に記載されていない。

(4) 満足度との関係

最後に、Q11 の総合的な満足度と、各項目の相関を表6に示す。Q11は教育学部のベストティーチャー賞候補者の選定にかかる評価項目の1つである。表6から、前期・後期ともに、満足度は学習時間との相関がほとんどないが、それ以外の項目との間には比較的強い ($r = .54 \sim .76$) 正の相関がみられた。また、学習時間以外の項目間についても、およそ中程度の正の相関がみられた。

表6 満足度 (Q11) と各項目の相関 (前期/後期)

	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
Q11 満足度	.01/.03	.57/.59	.63/.64	.54/.57	.62/.57	.74/.76	.73/.74	.66/.65	.57/.58
Q2 学習時間	--	.16/.26	.02/.11	.09/.15	.02/.08	.01/.00	.05/.08	.01/.09	.06/.03
Q3 主体性		--	.61/.62	.43/.45	.56/.53	.48/.48	.56/.54	.48/.42	.39/.40
Q4 理解度			--	.46/.51	.66/.66	.60/.63	.60/.63	.53/.54	.41/.44
Q5 シラバス内容				--	.57/.55	.50/.54	.47/.54	.49/.50	.38/.46
Q6 シラバス目標					--	.56/.54	.55/.55	.50/.45	.41/.41
Q7 説明						--	.69/.71	.70/.66	.52/.59
Q8 興味関心							--	.63/.63	.47/.52
Q9 資料								--	.47/.48
Q10 質問									--

4. 総括

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、前期・後期ともに、遠隔授業を中心とした授業実施となった。その中で、各教員が、それぞれの科目の特性に応じた授業形態を採りながら、様々な工夫を凝らした授業を開講した。その結果、学生の満足度や理解度等のスコアが示すように、昨年度までと同様の、あるいはそれ以上の学びを提供したといえることができるだろう。

一方で、授業内外での学生の学修時間をどのように確保するかという点は、今後の課題でとなる。とりわけ遠隔ライブ型や対面授業においては、授業内で学修がある程度完結してしまうような様子も見られる。manabaなどのLMS(学習管理システム)を活用するなどして、授業外での学修機会についても、十分に担保するような授業運営が求められるだろう。

また、課題提示型の授業形態は、それ以外の形態に比べると、スコアがやや悪いことにも留意されたい。必ずしもライブ型の講義が優れているわけではないが、オンライン上で課題を与える際には、対面やリアルタイムでの指示や説明よりも、より詳細かつ明確に行う必要がある。また、場合によっては、オフィスアワーを活用してオンライン上でリアルタイムでの質問を受け付けたり、講義の一部を対面授業としたりするなど、双方向的でやり取りを伴う授業形態を取り入れることも検討されたい。

* * *

この授業アンケートのデータは、学生一人一人が時間を割いて回答した、貴重な情報です。それぞれの授業改善に役立てられるよう、ぜひ活用していただければと思います。

2章 令和2年度教育学部授業紹介報告

1. 授業紹介の実施計画

(1) 授業紹介の目的と枠組み

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針にある FD の定義には「大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組」とあり、各教員が自発的に自身の教育方法を向上・改善させることが求められている。本学部の教育改善委員会においては、各教員が授業方法・授業運営の改善をはかり、教育の質的向上を目指すことを目的とし、例年「授業参観」を行ってきたが、新型コロナウイルス感染拡大により実施困難となったため、本年度は代替として「授業紹介」を実施した。

(2) 授業紹介の実施

事前に教授会で実施手順について説明したのち、前期については7月31日（金）～8月26日（水）、後期については第2回として主に前期未提出者を対象とし1月20日（水）～2月3日（水）の期間に実施した。教育学部専任・特任教員が担当する教育学部開講の授業科目および教育学研究科・教職大学院の授業科目から担当科目1科目を選び、① 授業準備、② 授業運営、③ 成績評価および④ 授業時間外学習の支援 について実施方法、工夫、課題等の記入を求めた。授業参観では報告書は、メール添付、紙媒体のいずれかによる提出であったが、今年度はGoogle フォームによる回答も加えた。

2. 授業紹介の実施状況

2回の授業紹介の回答数は延べで39件(前期28件、後期11件)であった。昨年(令和元年)の前後期の「授業公開・授業参観」の参加者数の倍にのぼり、直近10年では最多となった(図1)。

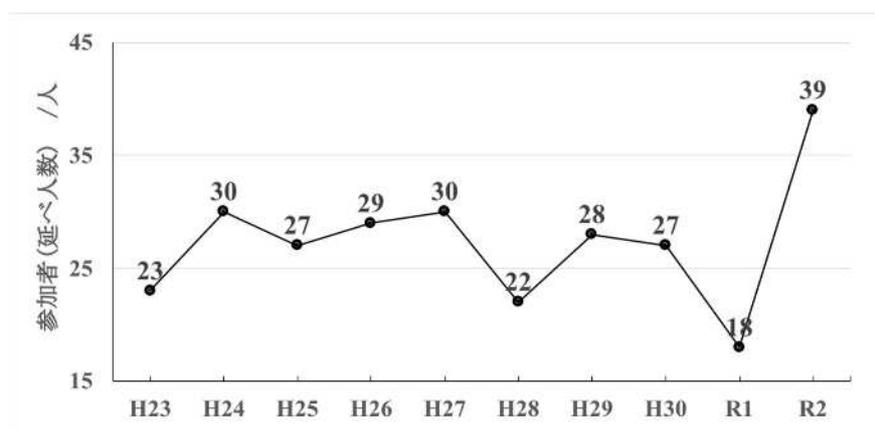


図1 授業参観(令和元年まで)および授業紹介参加者数の推移

3. 授業紹介における記述

前期実施の第1回授業紹介で寄せられた回答の8割以上が「遠隔ライブ Zoom 等」またはこれに他の媒体を組み合わせた授業によるものであった。そこで、ここではその回答の一部を抜粋、要約して紹介する。その他の授業形態に関する回答や第2回の回答など、本報告書で紹介できなかったものについては、9月および2月教授会資料も参照されたい。

(1) 授業準備

- Zoom と manaba を併用し、授業資料の事前配布、事前の課題の告知、成果物の共有を行った。
- PowerPoint 等を、PC 画面での見やすさに配慮して修正した。
- Zoom の視聴特性を考慮し、授業で扱う内容を精選した。授業提示資料の配付を検討したが、視聴時間が長くなりすぎると考えた。
- データの配布では授業に支障をきたすため、紙媒体を学生の自宅に郵送した。
- 各回の授業担当学生との打ち合わせを Zoom で実施した。
- 対面実施時以上に授業中の指示の明確化と視覚化を事前に行った。
- 授業で使用するスライドと関係する図表類をまとめた資料を作成し、毎回 manaba で公開した。
- 教科書のコピーを資料として受講生に提供する必要があるため、一度、対面授業を実施し、資料の提供とともに、補足説明を行った。

(2) 授業運営

- ブレイクアウトルームに個別に教員を配置し、少人数による討議を重ねた。
- グループセッションで映像オンにしない学生がいたが、慣れてきたという感想が寄せられた。
- 遅延やデータ容量等の観点から、manaba や Zoom から YouTube へ変更した。
- 動画の視聴だけでなく、発問や受講生同士の話し合いを設定した。
- 対面授業の制限が緩和されて以降、受講生の人数を調整して模擬授業を実施し、その様子を manaba で動画配信した。
- 対面ではアンケートを紙媒体で行っていたが、google フォームを使用して行わせた。
- 質問については、チャット機能を用いて随時提出してもらい、その都度対応した。
- 授業後に提出してもらった「振り返り」に目を通し、次回授業の開始時に紹介した。
- 授業の理解度、満足度、興味、意欲を7段階で評定してもらい、学生の理解度や動機づけの変化に注意しながら、次回の授業準備の参考にした。
- さまざまなメディアを自宅で視聴させたことで、板書のみでの講義内容よりも幅が出た。

(3) 成績評価

(i) レポート

- 対面と同様の評価方法としたが、とくに問題なかった。
- 期末レポート評価のルーブリックを提示した。
- 遠隔課題の適切な分量・回数を目安が測りづらかった。

(ii) 試験

- 授業中に課題を出して、60 分解答させ、授業後、その日の 23 時 55 分までに manaba で提出する最終試験を実施した。
- 対面型の確認試験。
- Zoom を用いて試験を実施。

(iii) プレゼンテーション

- 個々人の学びの成果をプレゼン形式で発表させた。

(iv) 総合的評価

- 授業ごとに課した課題、模擬授業、最終レポート課題を総合的に判断して、成績評価とした。
- Zoom のブレイクアウトセッションを使用した議論は、各グループでの議論への貢献姿勢や発言している内容を対面実施時以上に正確に把握・聴き取ることが可能となったため、対面実施時以上

に成績評価につながる情報が得やすかった。

(4) 授業時間外学習の支援

- manaba で提出されたレポートへのコメントや質疑などを通して支援した。
- 授業後にミーティング・ルームに残って質問できるようにした。
- オンラインで利用可能な大型辞書や文献データベース等を紹介して利用を促した。
- 毎回課題のワークシートを用意して manaba で提出させた。
- 学生が作成したアンケートを manaba にアップさせて、学生同士指摘し合わせた。
- 授業終了後にスライドを manaba で公開した。
- 電子メールや manaba(「レポート」のコメント機能)で質問を受け付けた。

(5) その他、課題など

(i) 授業について

- Zoom、manaba、YouTube、respon とたくさんのページを行き来することが学生の負担になる。
- 画面遷移と説明のタイミングが同期できていなかった可能性がある。
- オンライン上で使用できない映像資料等の代替手段・教材の用意が困難。
- 板書を中心とする対面授業と比べて進度が速くなりすぎる。
- 受講生の顔を確認しながら授業を進行するように工夫していきたい。
- Zoom を活用したことで、多くのゲストティーチャーの招聘が可能になった。
- 遠隔授業では情報・意見のやり取りが一方向的になったので、小テストなどを適宜取り入れて受講生が能動的に授業に参加できるようにしていきたい。
- 知識伝達型授業の場合、必ずしも Zoom によるリアルタイム授業でなくても良いかも知れない。
- 受講生同士のグループ活動、グループ協議を遠隔授業では十分に行うことができなかった。

(ii) 学生について

- グループ討議はメンバー構成によって学修の成果や満足感にかなりの差が生じていた。
- 「対面」では質問が全く無かったが、メールや Zoom の chat による質問が多かった。
- ツールの問題よりも、当該学生の対話力によるところの方が大きかった。
- 他者の意見との関連性を自ら見出したり、出されている意見を構造化してまとめたり、新たな問いを発したりする頻度は、対面実施時よりも高かった。
- 例年よりも、理論面における院生の理解は深かったため、むしろ内容が濃くなり発展的内容まで扱うことが出来た。

4. まとめ

例年「授業公開・授業参観」では参加率の低さが課題とされ、様々な工夫が試みられてきたものの、十分な改善には至らなかった。授業紹介は今年度はじめての試みであり、さらにコロナ対応や管理棟・理系研究棟の改修などに伴う教員の業務増加など今年度特有の困難な要因が多分にあったにもかかわらず、参加者数が最近10年で最多となったことは、特筆すべき点である。また、数のみならず、寄せられた回答は有益なものが多く、教授会や報告書などを通して、遠隔授業のアイデアや諸課題を早期に情報共有できたことは意義深い。また、寄せられた回答のなかには、ご本人から直接詳細を説明して頂きたいと思うものも多々あった。次年度以降も授業紹介を実施する場合、そのような機会を設けてもよいかもしれない。

3章 教育学部学生 FD 委員会の活動

1. 学生 FD 委員会の概要

学生 FD 委員会は、本学部の授業や教育の改善を目的として FD 活動を担う学生主体の組織で、各専修 2 名の委員から構成されている。FD 委員会の具体的な活動内容として全国学生 FD サミットへの参加や学部・大学院合同シンポジウムの企画・実施、ソフトボール大会の運営、履修支援等のピアサポート活動などを行っている。

今年度の FD 委員会は、新型コロナウイルスの影響もあり、全国学生 FD サミットの中止や大学祭中止に伴うソフトボール大会の中止などと活動内容が制限されている中での活動となった。そのため、学生・教員間で授業について話し合う機会である「FD シンポジウム」と学生の履修登録などのサポートを行う「ピアサポート」の 2 つの活動を班分けはせず、学生 FD 委員長と副委員長を中心に活動を行った。

2. 各活動についてと振り返り

(1) FD シンポジウム

今年度は新型コロナウイルスの影響を受け、特に前期では鹿児島大学全体で遠隔授業が実施され、新しい授業形態へと切り替わるなど学生・教員ともに手探りの状況での授業となった。このことから、今年度の FD シンポジウムでは「コロナ禍における授業のあり方」というテーマを設定し、コロナ禍における本学部の教育活動について学生がどのように感じているか、どのような点に不満や不便さを感じ改善を求めているかについて、教員と学生が対等な立場で意見交換を行い改善に向けての活動を目的として開催するに至った。

シンポジウムの開催に向け、学生 FD 委員会でも話し合いを重ねてきた。このテーマに対し、特に今年度入学の 1 年生は、入学と同時に遠隔授業が始まったことで大学での授業や人間関係で不安や問題を抱えているのではないかという予想を立てた。そこで、実態調査として 1 年生にアンケートを行うこととし、FD 委員会の話し合いの中で 1 年生の不安や問題点として考えられる項目を挙げ、アンケートの質問項目を考えた。アンケートは、鹿児島大学教育学部の学生に対して各学科の SNS を通じて行った。全部で 42 名からの回答が得られ、多くの 1 年生が授業への不安だけでなく、実生活における心理的な不安やストレスについても回答してくれた。

実際の FD シンポジウムでは、「コロナ禍における授業のあり方」という大きなテーマについて①授業のあり方（対面授業と遠隔授業の混在と、オンデマンド型や資料配付型授業について）、②レポートや課題の作成および試験について、③ 1 年生へのサポート、④今後の学生間の交流のあり方の 4 つのトピックを設け、アンケート結果も踏まえながら、学生・教員を交えた 4～5 名ずつでのグループディスカッション形式で進めた。

①授業のあり方については、対面授業と遠隔授業が同日にある時に大変さを感じることに、遠隔授業におけるグループディスカッションでは初対面同士でもあることに加え、ビデオをオフにしたままの学生もいるということでコミュニケーションの取りづらさがあると分かった。また、授業によっては、資料を配付されるだけの講義もあり、授業の質と変わらない授業料との差に疑問を感じるという声も上がった。一方で、遠隔授業ならではのメリットとして、移動時間がかからないため時間の有効活用ができるという意見もあった。

②レポートや課題の作成および試験については、1年生の立場を踏まえた意見が多く挙がった。縦のつながりが希薄化している1年生にとって、レポート課題や試験の概要に関する情報提示の仕方や、課題提出後のフィードバックにはより配慮が必要であるだろう。また、全学年で共通する意見としては、課題が多すぎるという意見が挙がった。対面による試験の実施が厳しい状況の中でレポートでの評価は仕方ない部分もあるため、学生と教員が互いに納得のいく方法が見つかるまでは、学生が一つ一つの課題をコツコツ取り組む姿勢や教員のレポート課題を提示する際の配慮が不可欠であるように思う。

③1年生へのサポートにおいては、アンケート結果も踏まえ多くの困難について共有された。特に縦のつながりだけでなく、1年生同士の横のつながりもないことから、1年生が一人で悩みや不安を抱えてしまう状況がある。そのため、manaba上で匿名での質問ができるようにすることや、Zoomなどのweb会議システムを利用した親睦会、また、ボランティア活動、レクリエーション、スポーツ大会などの開催により、コミュニケーションの場やきっかけを作ることが必要だという意見があった。実際に対面での活動となれば感染症対策などの検討が必要であるが、今後コロナ禍が継続する可能性があることを考えると、その検討は大いに意義があるものであると考える。

④今後の学生間の交流としては、学科内での交流としてボランティアの実施や、SNSを活用した交流の場を設けるといった方法が挙げられた。一方で、この状況を踏まえ、遠隔であったとしてもコミュニケーションを取る方法として活用できるのではないかという肯定的な意見もあったことから、今年度に導入した遠隔システム等をより活用して、今できる方法で交流していくことも必要だ。

今回のシンポジウムは、それぞれの立場で意見交換を行うことで、互いに見えていなかった思いや意図を知ることができたという点では大いに意義があったのではないだろうか。一方、遠隔授業が学生・教員ともに手探りの状態で始まったこともあり、具体的かつ効果的な対策などが挙げられにくいと感じた。次年度の1年生が同じような悩みを抱えないようにするためにも、特に1年生へのサポートについての対策は早急に行う必要があると感じた。また、課題としては、話し合うトピックが多く、一つ一つに対して十分な話し合いができなかったこと、シンポジウムの参加者が学生・教員ともに少なかったこと、web会議システムZoomによる開催の中で学生と教員で初対面での話し合いだったということもあり、グループによっては活発な話し合いがしばらくという状況があったことが挙げられる。FDシンポジウムだけでなく、FD委員会という存在をもっと多くの学生・教員に知ってもらい、気軽に頼ってもらえるような存在にできればと思う。そのためにも、まずは今回アンケートに協力してくれた1年生へよい形で知ってもらえるようにしなければならない。

(2) ピアサポート

ピアサポートでは、昨年の『履修登録のすすめ』が多く活用されたことから、今年度は2021年度版を作成することにした。このパンフレットを用いて、学生が自分の履修状況を確認したり授業をうまく組み合わせたりすることで大学生活をより充実したものにする、また、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、各領域で縦のつながりが希薄化しているという現状があるため、新入生や、第2免許を取得予定の学生にも履修のサポートとなることを目的としている。

2021年度版『履修登録のすすめ』は、①履修登録に関する日程一覧、②履修登録に必要なもの、③『教育課程』の見かた、④各課程・コースにおける履修登録の注意点、⑤こまったときは、⑥(付録)時間割書き込み用ワークシートの6つの項目で構成されている。③『教育課程』の見かたでは、今年度の1年生から教育課程が新しく改訂されたことを踏まえ、新・教育課程を参考に初等教育コース、中等教育コース、特別支援教育コースそれぞれの学生が一目で分かるように表にまとめた。また、④各課程・コースにおける履修登録の注意点では、FD委員会に各領域の学生が所属することから、領域ごとに履修登録上の注意点やアドバイス等をまとめたものを一覧にして紹介している。

今後の課題としては、ピアサポートの進め方と内容の検討の2つが挙げられる。進め方については、今回はコロナ禍において集まることが難しいという点を踏まえ、委員長・副委員長を中心として行ったため、他のFD委員が作成に関わる機会が④のみと限定されてしまい、多くの意見を踏まえた上での作成につなげられなかった。そのため、活動開始時に具体的な見通しを立て、担当箇所を振り分けるなどして全員が協力して作成することで達成感を共有し、活動への意欲につながるようにしていきたい。また、内容の検討については、今年度は主に1年生(次年度の2年生)に向けてという意識が強くなってしまい、特に③では、新・教育課程しか取り上げていない。そのため、幅広く活用してもらえよう、旧・教育課程にも触れるなど、内容の充実させるための検討が必要である。

今後としては、2021年度前期の履修申請期間が始まるまでに設置させてもらい、多くの学生に活用してもらいたい。

3. 今年度の成果と今後の課題

今年はコロナ禍において活動自体に制限もあったが、web会議システムZoomを利用した委員会活動やFDシンポジウムの開催、新しい教育課程に対応した『履修登録のすすめ』の作成を無事に進めることができた。また、昨年度の反省を踏まえ、FD委員同士がコミュニケーションを取りやすくするために学生同士でのグループディスカッションを積極的に取り入れたり、毎回の活動を報告したりすることで、参加しやすいような雰囲気作りにも取り組んだ。

一方で、各領域で参加する学生にばらつきがあり、対面及びオンラインでの委員会活動の参加者が少なかったという実態より、FD委員会の活動のあり方については検討する必要があるのではないだろうか。昨年度も報告があったように、この教育学部学生FD委員会は、自主的に集まって構成されているわけではないため、学生の責任意識にも差があるように感じられる。今後も各領域から数名を選出するという方法でFD委員会を構成していくのであれば、まずはFD委員会自体を教育学部内の学生及び教員に知ってもらうことが必要である。そのためにも、我々が作成した『履修登録のすすめ』を広く活用することや、次年度への引き継ぎを十分に行うことを通して、よりよい大学生活の支援のための積極的な参加を促すことができるようにしていきたい。

4章 令和2年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会 FD 講演会

1. 講演会について

- 開催目的 (1) 遠隔授業の導入による新たな授業の在り方について考える。
(2) 教育データを通して学生の学習プロセスについての理解を深める。
- テーマ 「コロナ禍を機に考える ICT でできる授業改善：ラーニングアナリティクスからのアプローチ」
- 講演者 九州大学基幹教育院 ラーニング・アナリティクスセンター 山田政寛准教授
- 開催日時 2020年7月30日 13:30 - 14:30
- 会場 教育実践総合センター1階多目的室 および Zoom によるリモート開催
- 出席者 63名（うち教育学部40名、附属中学校3名含む）
- 会の流れ あいさつ（教育学部長 有倉巳幸先生）
講演
質疑応答
まとめと閉会のあいさつ（武隈晃教育担当理事兼全学 FD 委員）

2. 学部長からの挨拶

本日は、教育学部 FD 講演会にご参加くださりありがとうございました。今回の講演会ですが、当初は対面を想定していましたが、コロナウイルス感染拡大防止を受けて、オンライン開催となりました。今年度は、およそほとんどの先生方がはじめて遠隔授業を経験され、試行錯誤の中でなんとか前期末にこぎ着けたといったところだと思います。しかし、この状況は逆の見方をすれば、授業改善について改めて考える機会を提供してくれたともいえます。対面ができない中で、単位の質及び、学生の学修をどのように保証するか、対面授業ができないからこそ、それに代わる十分な学修時間と環境を工夫し提供することで、学習者目線にたった授業改善を図る機会になったと考えています。

今回、教育改善委員会、教務委員会の合同企画によりご講演いただく九州大学基幹教育院自然科学理論系部門ラーニングアナリティクスセンター准教授の山田政寛先生には、この機会だからこそそのテーマをいただきました。ありがとうございます。

なお、全学にも広報したところ、教育学部以外からも（理事をはじめ）多くの先生方にご参加いただきました。ご参加いただきました先生方に感謝をし、ごあいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしく願いいたします。

3. 講演概要（*スライドと講演をもとにメモをとったものに、一部加筆修正を行っている）

(1) はじめに（自己紹介）

教育工学を専門とし、「あなたの存在感」の学習効果、コミュニケーションにおける社会的存在感の効果等について研究している。

(2) 新型コロナ禍における教育の変化

現在、新型コロナ禍における教育の変化が生じており、各大学は、オンライン学習を進めることを推奨されている。これに対して初等中等教育では、自治体の指針に従い、ある一定期間対面授業を中止し、その後分散登校や分散授業の実施で対応している。文部科学省から GIGA (Global and Innovation Gateway for All) スクール構想が打ち出されているが、この教育をうけた学生が将来大学に入ってくることを見越しておく必要がある。現在、教科書や紙の教材を活用した家庭学習は 100%であるが、動画教材は 10%、同時双方向のオンライン指導に至っては 5%にすぎない。

(3) オンライン学習はパンドラの箱？

こうした背景を受けて、現在実施しているオンライン学習から、平時における授業の形を見直すことを提案している。実際、LMS (ラーニングマネジメントシステムズ) で出席をとるように促したりしているが、九州大学においても課題提出程度使用していてもすべての教員が使っているわけではない現状がある。熊本大学の鈴木克明先生は、NII シンポジウムにて「無理はしないで同じ形を目指さないこと。平時に戻るまでの遠隔授業のデザイン」ということをおっしゃっている。また、九州大学のアンケートでもオンラインで一部授業を行ってほしいという要望は 6 割強である。そこで、オンライン学習を経験することで「オンラインでできることなら集まる必要がない」と考える教員や学生が増えることを前提に、平時における ICT 活用型授業の本格化を検討することを目的として研究を行うこととした。

まずは、ICT を活用した授業改善を考えてみる機会としてラーニングアナリティクス (LA) を行った。

(4) LA とは

LA とは、情報技術を用いて学生からどのような情報を獲得し、どのように分析・FB すればどのような学習効果・FB が促進されるかを考える分野のことである。具体的には、ICT 利用を前提とする学習ログをフルに活用し分析することとなる。

また、LA を使えば可能となる授業改善サイクルには、シラバス作成や教材改善の提案、学習ログ分析などが考えられる。学習ログ分析では、大学院生などのラーニングアドバイザーを活用し、授業中に学生があるスライドで止まっているから資料の順番を変えたほうがいいのかなど提案することが可能となる。こうした分析は、授業期間後のワークショップにおいて生かしやすいが授業前中後を通してリアルタイム分析やドロップアウト等の傾向を提示することも可能である。

そもそも九州大学は、2016 年 2 月に日本の大学初の専門センターとして学習データの分析をはじめ、2018 年には研究チームとして学部横断的にデータ分析を行うようになった。そして現在 M2B (ミツバ) と呼ばれる、Moodle、Mahara、BookRoll (デジタル教科書配信システム) を活用している。

(5) BookRoll とは

BookRoll は、画面のカスタマイズのみならず、わかった・わからないという意思表示も可能となっている。また組み込み型評価（ステルス評価）として、優良な推薦情報をつけたりすることも可能（自動的につけることも可）である。さらに、受講者による BookRoll 上の教材閲覧状況をリアルタイムで可視化することにより、受講者の状況に合わせ授業進行を調整・即時的な授業改善が期待できるものである。たとえばマーカー解析を用いれば、学生が「どこに」「よく」マーカーを引いているのかがわかり、学生の注目度や理解度を知ることができる（数値化も可能である）。色分けすることにより、言葉の関連付けを可視化できたり、メモの内容を含めた知識マップの作成により個人やクラス全体でどのように理解を深めているか教員も学生も客観的に学びを振り返ることができる。

(6) 3つの事例

ここで、「事例1：学習ダッシュボードを使った事例」、「事例2：中学校合同証明問題」「事例3：高校1年生80名に対する数学・英語の6週間のデータ分析」の3つの事例を提示する。事例の取り扱い上、内容については端的に扱うのみとする。

事例1は学習支援システム等に残る学習に関する行動データを可視化し教員や学生へ提示するものであるが、どこがわかってどこがわからないか直観的、視覚的に学生に伝わるような評価を行うことで、自己の学習を客観的に評価できたり、他の学生の様子が伝わるなど、学生からも高評価を得ていた。また、レクチャースタイルを主とする授業でも受講者の理解に寄り添うことで効果的な授業進行・改善が可能となることが示された。最近、レクチャースタイルを批判する風潮があるが、そういう問題ではなく、できることはもっとあるからそれをやることに目を向けるべきではないか。事例2では、LAを活用し、見通しをたてて自分なりの証明問題への取り組み方を考えさせる授業を展開した事例である。教員が生徒の間違いや時間のかかり方に注目し、生徒が主体的に学べるようグループ検討をいれるなど授業改善に用いられた事例である。事例3は、授業外学習で難しいところには黄色いマーカーを引き、わかったらマーカーを消すということを基本に毎週教員に分析結果をフィードバックしたところ、学習者のマーカーの引き方から成績との関連の有無などわかった事例である。

(7) LAによってできる授業改善

ここまでLAを用いた事例を伝えたが、LA使ったからと言って授業を行うことが楽になるわけではなく、学習者の理解に寄り添う意識が求められる。これは、オンライン授業だけでなく対面授業でも意識すべきことであるが、LAを用いることで、対面では見えない様々な学習者の様相がみえてくる。そこで見えてくる学習者の「わからないところ」を少しでも拾い上げることが大切で、それをもって授業のリデザインへとつながるのである。

また、「授業は対面で行うべき」という教育に対する信念があるかもしれないが、オンライン学習環境の特徴をとらえ、できることはオンラインで行うことへと変化を遂げている途上にある。同様に教育や授業についても変化の時を迎えているが、それは反転授業の充実化であったり、評価についての考え方にも表れていたりする。たとえば「テストは知識の再生を測るべき」といった考えから学習対象を身に着けるプロセスを評価する視点（マスタリーラーニング）への変化である。こうした学習のプロセスをみることは重要であり、テストで剽窃するのではないかという最近の懸念を払しょくし、わからないことを自分で調べてやっていくことが、求められるスキルとなる。そこでは何を見て（どのような文献を用いて）回答したのかまで求めることになることから教育関係者の教育データリテラシーが問われることとなる。現在 UNESCO や EDU SUMMIT で求められているのは、データを見た時に何をすべきかを考える力であり、ここでは分析ツールが必要になるし、データに基づくインストラクションデザインも必要である。そもそも教育データリテラシーとは、論理的にデータを解釈することであることから、データを見て教師自身の、学習者自身の経験と突き合わせて論理的な解釈をすることが求められる。

このような、データを読み取って授業設計や学習支援に生かす観点を見出す力は、教員養成でも求められるのではないかと考えており、現にコロンビア大学 Teachers' college では、理工系ではなく人社系で世界初の LA の専門科目が登場している。もちろん、大学の FD としても活用できるし、教員の授業データを共有することもおもしろいのではないかと考える。

（8）教育データリテラシーを高めるためには

最後に、教育データリテラシーを高めるためには、LA の日常化が必須であり、効果を高めるポイントはどこにあるのか、エビデンスを普段から蓄積しないことには何もできないと思う。そこで、TA の机間巡視や質問応答状況、トラブル対応などの状況とデータを突き合わせることで改善すべき点がみえてくると考え、九州大学では、TA の育成にも力を注いでいる。ちなみに九州大学では、コースを受けた者のみが TA になることができ、そのコースを受ければ学部 3 年生からもなれる仕組みとなっている。さらに科目を履修すれば Teaching fellow（授業担当可）になることも可能である。

4. 質疑応答（抜粋）

Q：操作がわからない学生もいるのでは？

A：BookRoll はマーカーやメモ、ブックマークなど紙のテキストでもできるような機能が主なので、操作に迷うことはほとんどない。教員にとっても PDF をアップロードするだけなので、簡単に使用することができる。

5. まとめにかえて（武隈教育担当理事兼全学FD委員）

今回の講演で、オンラインの一步先に何があるかについても聞いた。特に今後対面授業をどうよりよくするかという話もあったが、現在のところまだそこまで見られていない状況である。しかし With コロナと Post コロナの準備をどうすればいいのか考えさせられる内容であった。また最後にポストフェローの話にも触れられたが、鹿児島大学では大学院のFDが遅れているので参考になった。今回は他学部の先生や附属学校からも参加されておりそれぞれの立場で学ぶことができたと思う。評価の在り方など今後、様々な取り入れ方考えていく必要あると感じた。今年は教員も今までやったことがないくらい授業改善をしたという声もあるが、目下、学生にアンケートを実施しているところでもありこれからのFDの参考になったと思う。ご講演ありがとうございました。

6. 参加者からの感想

- ◇ 貴重なご講演ありがとうございました。LAなど初めて触れる概念もあり、貴重な時間となりました。マーカーと成績の相関、逆相関など興味深いでした。ツールを使うだけでなく、次の授業に生かせるほどに「使いこなせるか」が課題であることを実感いたしました。そのなかで、講義（レクチャー）も大事というお考えは賛成です。臨床心理分野専門職学位課程に在籍しているからこそ、座学の重要性を実感しております。山田先生が仰る講義であっても『やりよう』なのだろうと改めて思いました。他方で、パワーポイントの進化の素晴らしさに相反して「学生の読み込む力の弱さ」が気になっております。先人の歯ごたえのある文献を読みこなせない、手すらださないう学生が増えているようでそれをよしとしてしまわねばならないのか、課題と考えていくのかなど迷われます。多様なツールに適応しながら、大学教育とは何かを考える時代になってきた気がいたします。改めまして、本日は、ありがとうございました。（臨床心理学研究科）

- ◇ この度は貴重なFD講演会の機会を賜り、ありがとうございました。内容は先進的で興味深いものでした。対面式授業ではアクティブ・ラーニングの活用を心掛ける一方で、遠隔授業ではラーニングアナリティクスでデータをリアルタイムに活用する手法があるとお聞きしたように思いました。そして、両者の共通点として「受講者に寄り添う」ことが、教える側と教えられる側の充実に繋がるのではないかと感じました。その意味でも、両者を巧く活用するブレンド型授業形式があって良いのではないかと考えました。（医歯学総合研究科）

- ◇ 興味深いお話をどうもありがとうございました。講義中の学生の学びの様子が解析できるのが非常に興味深かったです。今回の解析では、Teamsで講義しながらそのテキストとしてBookRollを使用させ、BookRollにマーカーと理解度ボタン機能を

つけ、閲覧ページやマーカー、理解度のリアルタイムで記録を取り、その解析を行っていますね。この機能の付いた **BookRoll** は大学全体で共有されているのですか。このような記録機能の付いたものを全教員が使用すると、記録は残るので素晴らしいと思います。鹿児島大学でもこのようなシステムを利用してみたいです。気になるのが、ほかのメディアとの関連でした。オフラインの印刷体のテキストや動画データとの併用やその効果がわかるといいかもしれないと感じました。どうもありがとうございました。（医歯学総合研究科）

☆ ラーニングアナリティクスや教育データリテラシーに関しては大変参考になりました。今後は授業の質の保障や、成績評価、さらには“単位”の定義そのものについての議論が進むと思われますので、もしそのような関連の **FD** があればぜひ参加したいと思います。最後の **TA** に関しては、まさに日本での認識はアメリカに比べかなり遅れていて、九大の **TA** のやり方はやっとなアメリカ並になったと感じました。鹿児島大学は、**TA** に関しては大学院生に対する経済的な援助で **TA** の本質から程遠いままですので、改善が必要だと思います。現在、歯学部では遠隔授業から対面授業に戻っていますが、成績の良い学生と悪い学生の差が対面授業だった時と比べ広がったように感じます。（医歯学総合研究科）

☆ 山田先生、貴重なご講演をありがとうございました。コロナ禍という機会だからこそ、**ICT** を用いた授業やそれを改善するという試みがより意味を持つものと存じます。本学が **ICT** 環境を今後どのように整備していくかにも依ると思いますが、その中で可能なものは積極的に取り入れ、授業の実施ならびに改善につなげていきたいと存じます。本日はどうもありがとうございました。（教育学部）

☆ 授業中のログを使って授業改善に活かすことまでは、当面できそうにないですが、あらかじめ **manaba** にアップしたパワポに対して学生から「わからない点」「興味がある点」などについて意見をもらいそれを参考にして授業をするくらいなら、できそうだと思います。**manaba** の小テストで、調べて回答させるという使い方もあるなと思いました。今は、「知識の定着度を確認するため」（成績には関係ない）という目的で使っているので。ありがとうございました。（教育学部）

☆ テストは知識の再生を測るべきというこれまでのある意味常識が、自由に見て調べさせて、何を見て何を理解したかを評価する方向に向かうというのが印象的でした。私もただの記憶力テストをさせても、テストが終わった瞬間に全てを忘れてしまうという学生さんの意見を聞いているので、今後の社会を生きていく上で必要な力は正しい情報を検索できる能力かと思うので、共感しました。（農学部）

- ◇ 学生同士が互いの進捗状況や理解度を確認し合うことが難しい点がオンライン授業の短所であると感じておりましたが、ツールの使用や教員側の配慮によって欠点を補うことができると、認識を改めることができました。ありがとうございました。（教育学部）

- ◇ 最先端の研究ではこんなことがなされているんだとワクワクしながら聞かせてもらいました。小学校でも大学でも子どもの成長を具体的にどう把握した上で、根拠のある授業改善に繋げていくのかということに改めて感じました。子どもや学生さんの学びの事実をもっともっと見つめたいと思いました。鹿児島大学も **manaba** をはじめ科学的な教育研究が進みつつあります。教育学部の学生もそれらに触れて現場に生かしてやれば、これからの学校を中心として活躍できるだろうなと思いました。また、勉強の機会を作ってください。お世話された方々、ありがとうございました。（教育学部）

- ◇ お話を聞いて、エビデンスに基づいた授業改善の必要性を理解することができました。これまでも評価物としてレポート等を見てきましたが、学習者行動を分析するという視点は持ち得ていませんでした。分析ツールに精通して、自らの授業改善につなげていくことに加え、カリキュラム全体を通して、学習者の学びの分析を行い、個々の学生に応じた支援ができるようになりたいと思います。（教育学部）

1章 令和2年度教育学研究科教育実践総合専攻「教育改善アンケート」調査

1. はじめに

教育学研究科教育実践総合専攻（以下、本専攻と略記）では、例年後期の12月に教育改善に係る学生アンケートを実施してきた。今年度は、新型コロナウイルス感染症対策下という特殊な状況に在って、学生の学修・研究上或いは生活上の困難等、早急に対応が求められる事態の把握に努めるべく前期の7月から9月にかけて実施した。なお、後期には次章に報告する通り、アンケートに代えて院生・教職員懇談会を実施した。

2. 調査の実施方法

令和2年度の調査方法は以下の通り。

- ・実施時期 2020年7月14日（火）から9月10日（木）まで
- ・対象者 本専攻在籍学生
- ・調査手段 Google フォームを用いたweb方式（匿名）
- ・周知方法 担当係である総務係を介し教務係より一斉メールを送信
- ・質問項目 令和元年度の調査項目に準じる（章末にアンケート様式を掲載）

3. 結果及び教育改善委員会の分析や対応

1年生5名、2年生8名の合計13名より回答を得た。回答者数は、例年同様（前年度13名、前々年度10名）であった。以下、質問項目ごとに回答を示し、本委員会としての分析や対応を附記する。なお、記述回答の本文は、基本的に回答者入力のままとする。

(1) 「教育実践総合専攻共通科目」「学修コース共通科目」の授業について

【満足している点】

- ①グループで考えをまとめるところが他で味わえないので良いと思います。
- ②Zoomが多い。
- ③専門としている分野以外の教育に関する知見を深めることができる。
- ④自分では選択して勉強しないだろうが、必要であろう知識を教えてもらうことができる。
- ⑤意見交換が多く、視野が広げられる。
- ⑥自分の専門的に学んでいる分野以外も知ることができ、知識を増やすことができる点
- ⑦学校現場の深い部分まで学べる。

【改善して欲しい点】

①専攻共通科目で、グループでの共同レポートの際に、それぞれの貢献度に関わらずグループ全員が同じ評価をされるということをすぐに改善し、評価方法の見直しをしてほしい。大学院に通う学生の中には、金銭面で非常に苦勞しながらも、学びたい一心で覚悟を決めて通っている人がいる。私はその中の1人である。こうした人たちは、安心して学びに向かうことができるように、奨学金返還免除や授業料免除を検討したりしながらできるだけお金のやりくりを自分の力でできるように日々学びだけではなく、アルバイトなどにも励みながら頑張っている。奨学金返還免除や授業料免除にあたっては、日々の学びに対する先生方からの評価が関わってくる。そうした背景をもつ学生がいるのに、グループでの共同レポートが課された際の評価が、

レポートが書かれる過程を踏まえずして、グループのメンバーで同じ評価である。グループ活動では、共同という協力し合っているにもかかわらずどうしても貢献度や負担感に偏りが出てきてしまうのが現実である。それぞれ学生は中でもグループのメンバーと共に頑張ろうとしている。そして、先ほど述べたような背景をもつ学生は特に力を入れて人一倍頑張ろうとしている。グループ内での貢献度や負担感に差があるにも関わらず（そして、いつも同じ人だけが負担を負っている場合もある）グループメンバー全員が同じ評価であり、そうした評価により金銭面で苦勞している学生の将来の進路や今後の学びに大きな影響を与えられてしまうことに、納得がいかないし、それで本当に自分の学びや将来への道に影響が出て、道が閉ざされるようなことがあれば、私は大学院に通う自分を後悔してしまうと思う。共同レポートに取り組むことは、とてもよい学びになると感じているが、それと評価は別物にしてほしい。覚悟を決めて大学院に学びにきている学生のためにも、評価は個人についての評価にして、その人の頑張りをちゃんと見てほしい。

②中国の留学生の方々は非常に一生懸命学習していらっしゃると思いますが、同じ読み物を読むことは酷なのではと感じました。

③話し合い活動のやり方

④学修コース共通科目については、学生につけたい力や内容が定まっていないように感じる部分もあった。

⑤現職の方や年上の方が多くいるので、いろいろな方の話を聞きたいので、固定の班にするのではなく流動的な班構成が良い。

【本委員会の分析や対応】

両科目ともに、学生に学びの幅や視野が広がる実感を持たせられており、教育課程上の科目設定のねらいは概ね達成されていると見受けられる。個別の授業の進め方や評価方法について、不満を示す意見が認められたため、研究科委員会に於いて報告し、改善或いは誤解を生じさせない丁寧な説明等を求めた。

(2)「学修コース専門科目」の授業について

【満足している点】

- ①教科以外の先生方から学べる機会は自分の幅が広がるようで良いと思います。
- ②一対一の遠隔
- ③疑問をとことん追求できる。
- ④専門性をさらに深めることができるほか、他の芸術系の分野に触れることで、専門に活かせる知見を得ることができる。
- ⑤専門知識や技術を、少ない人数(受講生)で丁寧に教えてもらえる。
- ⑥人数が少ないので気兼ねなく気になったところを授業を止めて聞くことができる。
- ⑦自分の知りたいと思っていることを選択し、主体的に学べるから。
- ⑧疑問をとことん追求できる。

【改善して欲しい点】

- ①修士論文の作成につながるような内容を扱ってほしい。

【本委員会の分析や対応】

学生自身の専門分野や近接領域について、内容及び授業形式の両面で充実した学びの機会を提

供できているものと判断される。自身の修士論文作成と直結した内容を求める意見が一件寄せられたが、授業科目「課題研究Ⅰ・Ⅱ」を充実させると同時に、それ以外の授業については学生に対し学修の意義を明らかにする工夫も必要であると考えられる。

(3) 研究・学修環境（設備・備品・消耗品等）について

【満足している点】

- ①ほとんどリモートで登校していないので現段階ではお答えできません。
- ②Wi-Fi 環境がある。
- ③個々に集中できる学習スペースがある。
- ④サポートしてくれる先生と、いつでも研究を進めることができる環境がある点
- ⑤研究を進めるに当たっての設備がしっかりとある。

【改善して欲しい点】

- ①自由に使えるプリンタがほしい（紙やインクは自分で補充するでもよい）。
- ②トイレを綺麗にして欲しいです。

【本委員会の分析や対応】

寄せられた意見について、総務係・会計係及び研究科執行部に報告し、善処を依頼した。

(4) 研究成果の口頭発表（但し、修士論文発表会を除く）に係る指導や支援について

【満足している点】

- ①日々励ましていただいています。
- ②充実したゼミ
- ③指導教員が親身になって御指導してくださっている。
- ④色々研究や抄録に助言をいただけている点
- ⑤自分が納得するまで話し合うことができている。

【改善して欲しい点】

- ①改善指導が曖昧
- ②場当たりのように感じる。修士論文の作成に向けて系統立てて研究できるように補助してほしい。

【本委員会の分析や対応】

概ね良好な指導がなされていると言える。寄せられた改善点については、研究科委員会で報告し、改善或いは誤解を生じさせない丁寧な指導を求めた。

(5) 研究成果に関する論文執筆（但し、修士論文を除く）に係る指導や支援について

【満足している点】

- ①添削
- ②指導教員が親身になって指導してくださる。
- ③迅速に対応してくださる点

【改善して欲しい点】

- ①改善指導点が曖昧
- ②必要な情報を提供してほしい（実践の方法、分析の仕方など）。

【本委員会の対応】

概ね良好な指導がなされていると言える。寄せられた改善点については、前項同様、研究科委員会で報告し、改善或いは誤解を生じさせない丁寧な指導を求めた。

(6) 研究成果としての作品創作・演奏・競技等に係る指導や支援について

※【満足している点】・【改善して欲しい点】ともに記入なし。

(7) その他、大学院での学修や生活全般についての意見や要望

・奨学金がいつ出るかの連絡がまったくないなど、日々経済面で緊張した生活をしているため、経済支援についての情報や対応、せめて情報解禁だけでも、できるだけ早くしてもらえるととても助かるし、心構えができる。

【本委員会の分析や対応】

学生係に意見を報告し、対応を依頼した。

4. おわりに

アンケート回答率の向上が例年の課題でありながら、今年度も目立った改善をなし得なかった点は反省したい。新型コロナウイルス感染症が終息し、恒常的な対面授業実施に復した際には、授業時に回答時間を確保することも一案かと考える。

本章冒頭に述べた通り、今回のアンケートは感染症対策下の学修という特殊状況を考慮し、学生の困難等を把握すべく前倒しして実施された。結果的には、種々の制約下にも関わらず、概ね例年同様の学修を行なえている様子が窺われた。これには、本専攻に関わる教職員及び学生それぞれに試行錯誤があり、尽力した結果であろうかと思われる。一方で、困難に直面した学生の声を拾い切れていない懸念もあり、後期に於いては例年のアンケート調査に代えて「院生・教職員懇談会」を設定する運びとなった。次章に報告したい。

令和2年度前期 教育改善アンケート

教育学研究科教育実践総合専攻の大学院学生を対象にしたアンケートです。このアンケートへの回答は無記名で行なってもらいます。個人が特定されることは一切ありません。

回答期限：令和2年9月10日(木) 17:00

*必須

1. 0. あなたの学年を教えてください。*

1つだけマークしてください。

- 1年
 2年以上

2. 1-1. 「教育実践総合専攻共通科目」「学修コース共通科目」の授業について、満足している点とその理由を教えてください。

3. 1-2. 「教育実践総合専攻共通科目」「学修コース共通科目」の授業について、改善して欲しい点とその理由を教えてください。

4. 2-1. 「学修コース専門科目」の授業について、満足している点とその理由を教えてください。

5. 2-2. 「学修コース専門科目」の授業について、改善して欲しい点とその理由を教えてください。

6. 3-1. 研究・学修環境（設備・備品・消耗品等）について、満足している点とその理由を教えてください。

7. 3-2. 研究・学修環境（設備・備品・消耗品等）について、改善して欲しい点とその理由を教えてください。

8. 4-1. 研究成果の口頭発表（但し、修士論文発表会を除く）についてお訊ねします。あなたは口頭発表を、

1つだけマークしてください。

- すでに行なった。
 これから行なう予定である。
 行なう予定はない。

9. 4-2. 研究成果の口頭発表（但し、修士論文発表会を除く）に係る指導や支援で満足している点とその理由を教えてください。

10. 4-3. 研究成果の口頭発表（但し、修士論文発表会を除く）に係る指導や支援で改善して欲しい点とその理由を教えてください。

11. 5-1. あなたは研究成果に関する論文執筆（但し、修士論文を除く）を、
1つだけマークしてください。
- すでに行なった。
 これから行なう予定である。
 行なう予定はない。
12. 5-2. 研究成果に関する論文執筆（但し、修士論文を除く）に係る指導や支援で満足している点とその理由を教えてください。
- _____
13. 5-3. 研究成果に関する論文執筆（但し、修士論文を除く）に係る指導や支援で改善して欲しい点とその理由を教えてください。
- _____
14. 6-1. あなたは研究成果としての作品創作・演奏・競技等を、
1つだけマークしてください。
- すでに行なった。
 これから行なう予定である。
 行なう予定はない。
15. 6-2. 研究成果としての作品創作・演奏・競技等に係る指導や支援で満足している点とその理由を教えてください。
- _____
16. 6-3. 研究成果としての作品創作・演奏・競技等に係る指導や支援で改善して欲しい点とその理由を教えてください。
- _____
17. 7. その他、大学院での学修や生活全般について意見や要望があれば、自由に記述して下さい。

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Google フォーム

2章 令和2年度教育学研究科教育実践総合専攻「院生・教職員懇談会」

1. はじめに

前章「4. おわりに」で述べた通り、今年度は学生の声をより丹念に拾い上げる必要を考え、「院生・教職員懇談会」（以下、懇談会と略記）の場を設けることとした。

2. 懇談会実施の概要

日 時：令和2年11月16日（月） 10時30分～11時40分

場 所：第2講義棟3階 講義室C

周知方法：manaba でコースニュースを配信、ポスター掲示

出席者：

（教員）：濱崎専攻長、前田（晶）委員長、石原委員、大淵委員、片岡委員、日隈委員

（事務職員）：田邊総務係員、清水学生係員

（院生）：学校臨床系1名、人間発達系2名、生活・健康系1名、言語・社会系1名 ※参加学生のうち2名は留学生

次 第：

1. 趣旨説明
2. 教育改善委員会委員長の挨拶
3. 出席者の自己紹介
4. 全体による意見交換 ※当初設定した個別相談の希望者なし。
5. 本日の総括



3. 学生より出された意見及び教職員による回答・助言（「→」以下が回答・助言）

1. 学内で市価（10円/枚）より安価にコピーやプリントアウトができるよう工夫して欲しい。
研究に使用する資料や講義資料のコピー、プリントアウトに伴う出費に負担感がある。
→研究科長及び事務部と相談し、必要に応じて研究科委員会で対応を協議する。
2. 奨学金を始めとした学生支援の情報提供を充実させて欲しい。
→大学ホームページの「学生生活」を開くと、各種情報が掲載されているので随時確認するよう勧める。
→一斉メールで情報提供されるので遺漏なく確認して欲しい。
→日本人学生は学生係、留学生は教務係で相談を随時受け付けている。
→各種奨学金の応募書類作成についての助言、採択率等の情報提供が可能となるよう検討を進めたい。
3. 中国の学校等で実地調査を行うに当たり、研究科より紹介状を発行して欲しい。学生個人でアンケートへの協力依頼を出したが、門前払いにあうことが続いたため。
→研究科長と相談し、必要に応じて研究科委員会で対応を協議する。
4. 年度(学期)当初に行う manaba を始めとした各種ツールのガイダンスを充実して欲しい。
特に学部が鹿大以外の場合、各種ツールに慣れておらず、学期当初に戸惑いがあった。
→来年度以降の改善に繋げたい。

5. 日本の先行研究の調べ方、文献の入手方法に困難を感じる。
→附属図書館のレファレンスコーナーの活用も一案であることを伝える。
6. 研究上の支援能力のあるチューターをつけて欲しい。生活面での支援は不要でも、論文執筆時のネイティブチェック等を依頼できるチューターが必要。
→次の学期に向けて準備したい。但し、人材の確保が問題となる可能性がある。
7. 教員より修士論文作成に係る研究の現況（主にハード面での不自由の有無）について質問し、参加学生より概ね問題無いとの回答を得る。但し、オンライン講義の副作用として学生同士の繋がりが希薄であり、支援が必要であることを確認した。

4. おわりに

学生の人数5名は、決して多いとは言えないものの、各学修系及び留学生の参加を得られたことは、意見聴取対象の多様性確保の点で良かった。また、教職員、学生の双方にとって実に有意義な取り組みとなった。教職員としては、記述式アンケートよりも、より多方面にわたる詳細な意見を寄せてもらうことができたし、学生としては幾つかの問題点についてその場で解決やその糸口を得られる利点があった。本専攻は、基本的にはあと1年の設置期間を残すのみである。来年度も懇談会を実施し、学生の学修をより充実したものとできるよう関係各位の協力を仰ぎたい。



編集後記

本年度は、遠隔授業への対応に伴い、全学でも例年以上にアンケート調査等が頻回に実施されました。また、その結果に学びながら授業計画の変更等を行った教員も多かったのではないかと思います。その意味で、FD活動の存在意義が高まったといえます。

他方で、これまでFD活動を牽引する役割を担うべく取り組まれてきたベストティーチャー賞がその性格を変えつつあり、教員の業績評価という側面が強くなるのではないかという懸念も出てきました。今回部局で選考された候補者が受賞に至らないケースがあったことや、構成員数に応じた候補者枠が提案されるなど（これは実施には至りませんでした）、「場」よりも「個人」の評価にシフトする動きがありました。教育学部・研究科においても、今後学部と研究科（専門職学位課程）において同一基準で選考するよう求められており、その方法の検討が次年度の大きな課題となっています。

しかし、FD活動が自律性を失うとき、それは活動を形骸化させるだけでなく、授業を手段化するものになりかねません。教育学部・研究科らしいFD活動のあり方を意識しながら、今後の方向性を検討していくことが必要ではないかと感じています。（前田）

今年度は、授業アンケートの実施と分析を担当しました。遠隔授業の導入に合わせて、質問項目を一部見直したり、学生へのフィードバックの一環として、授業ごとの集計値を履修者に公開したりするなど、昨年度から少し方法を変えました。大量のデータを分析しながら感じたのは、満足度の高い授業には、たいいていくさんの回答が提出されていること、そして自由記述がたくさん書かれているということでした。私もそういう授業を目指したいと思います。（石原）

今年度はじめて教育改善委員会に参加し、大変多くのことを学ばせて頂きました。今年度私が担当した「授業紹介」は、例年の「授業参観」の代替として、手探り状態で実施したものでしたが、幸いにして、ご参加頂いた先生方からは、多くの有益なノウハウや遠隔授業における課題などをご紹介頂くことができました。いつ新型コロナウイルスの感染が収束に向かうか、今後の授業形態がどのようになるか不透明な部分もありますが、授業紹介で得られた知見が、当面のコロナ禍における授業実施、さらにはアフターコロナにおける授業改善の一助となれば幸いです。（須磨）

今年度の後期から保健体育科の宮脇先生の後任で教育改善委員として、学生FD委員会を担当することになりました。主な活動としては、シンポジウムの開催やピアサポート活動を学生FD委員とともに行いました。コロナ禍で学生FD委員を集めての取り組みが計画通りに進まないことが多々ありましたが、大村委員長と永田副委員長を中心にSNS等を活用して活動を展開することができました。新型コロナウイルス感染症の影響でこれまでの日常が大きく変わり、講義や学生生活で多くの課題が見えてきました。今後は学生にとってより充実した日々が送れるように対策を取ることが重要だと思います。（與儀）

本年度は、新型コロナウイルス対策がきっかけとなり、遠隔授業のやり方を一から学びつつ同時に実践し、切磋琢磨していくというPDCAサイクルに没頭する一年となりました。これほどまでに学部、いや大学という組織が教授方法や評価、学生とのコミュニケーションについて「学び発展させようとした」ことはなかったのではないのでしょうか。これはまさしくFD活動であり、学生・院生からのフィードバックを得て今も改善向上し続けています。今回得た知識や技術をAfter コロナの大学教育で活かされることを期待するとともに、教員養成に携わる者としてICT教育についても考えていきたいと思いました。個人的には、例年通りのFD活動には制限があったものの、FD講演会としてオンライン学習や評価について学べたことやシンポジウムとして学生・院生さんの意見を直接聞いたことは、貴重な機会となりました。一方で障害児教育という自身の専門領域からはオンライン学習に向き不向きの学生さんの存在が気になりつつも、個々の対応にとどまっていることから、FD委員としてできることがないか今後の課題としたいと思っています。(片岡)

日本国内外で新型コロナウイルスが流行し、大学における教育活動も大きな変化を余儀なくされています。以前から行われていた対面授業が大学のあるべき授業形態で、遠隔授業等の事を考えた事ありませんでした。しかしコロナ流行後対面授業が難しくなる中、遠隔授業を行わざるをえなくなり、それ迄の大学の授業に対する思いが一変し、コロナ流行の下で大学の授業を遠隔でどう行っていくべきなのか色々考えさせられました。誠に残念ながらコロナ流行は今後も続く事が予想される中で、遠隔授業をどう行うべきなのか色々模索している所です。遠隔授業となるとどうしても機器を使用せざるを得なくなります。率直に言って私は機器に弱いので、出来るだけ機器の使用範囲が小さい方法で遠隔授業を行っていきたくと思っています。ただ受講生にとっては、何らかの形で講義担当者の顔や姿が見え肉声が聞けるような形が良いのだらうと思っています。受講生の希望に沿うためには、私が機器をもっと使いこなして映像が見える形での遠隔授業が良いのですが、私自身の機器に対する理解度を考えると即座に行えるものではありません。受講生の希望と私自身の機器使用能力との狭間の中で、今後どの様な授業を行っていくべきか大いに悩んでいる所です。私は、今年度教育改善委員会に関係させていただいて、この問題をどう解決すべきか考えている所です。委員としての任期が終了する今、自己が抱えている課題解決に今後取り組んでいきたいと考えています。(日隈)

いかにして まことの道にかなひなむ 千とせのうちの 一日なりとも (大淵)